文献資料紹介

《第64回》

【永田（半山）の「八代龍王」碑について】

山本秀雄

屋久島には、路傍といわず山中といわず、実に沢山の碑石が建っている。周囲百キロぐらいの小さな島に、墓石を除いても四、五百基を数えることができようか。

なかでも一番多いのは「一品法寿権現」の碑石で、家の形に造られたものが多い。地元では山の神とも水の神ともいわれている。

ほかに、エビス神、森の神（久久能智神）、仁王、稲荷、疱瘡神、家宅神、地蔵、歯の神、眼の神、漂着神まであり、千差万別である。

ところが、最近になって、今一つ何とも解釈に苦しむ新しい碑石が発見された。

その碑石についてふれてみたい。

今年の五月十五日、永田区の知人、大山純也さんが歴史民俗資料館を訪ねてこられた。釣りに出かけたところ、妙なものを見つけたので調べてほしいという。

大山さんは釣りのベテランで、初心者の出かけるようなありふれたポイントには興味がない。あまり人の行かない、初心者は恐ろしくて近寄れないような釣り場を好んだ。大物が釣れるからである。

この日は西部林道の半山まで出かけた。

永田区から車で十分ほどのところである。

西部林道を建設するとき、山腹を人工的に切り裂いて道路を作ったので、山腹が半分に欠けているから「半山」と称するのか。

西部林道から眺めると頭上にも、眼下にも樹林が生い茂った崖が続く難所である。

西部林道に車をとめて碑のある海岸へおりるには、急斜面を二百メートル以上も樹木につかまりながら、滑りおりるしかなかった。苦労しながら海岸までたどり着くと、そこは白い花崗岩の折重なった荒磯だった。それでも、碑から波打際までは十四、五メートルもあろうか、ふつうの人は、怪我をするのが恐ろしいからあまりゆかない。

降り口の目印に樹の枝を折っておいたのだが、その目印もすでになくなっていたので、あてずっぽで降りていった。そのために、この前きたときには気づかなかったものに、その日、気づいたのかもしれない。

大山さんは奇妙なものに目をひかれた。

ゴロゴロ重なり合った巨石の間に、巨大な石のドーム、お碗を二つに割ったような磐座の入口に、その碑、「八代龍王」（八大竜王）の碑石は立っていたのである。

人間が数人雨宿りできるほどの広さで、誰かが焚火をたいたのか、天井が黒く煤けていた。

しかし、ドームの入口に立っている、高さ三尺の花崗岩の碑石（頂きが丸く削られた石柱）は、明らかに人工のものだった。

風化されてはいるが、四つの文字が陰刻されているという。

話をきいて、歴史民俗資料館の私たちも驚いた。そのような、いわば人跡未踏に近い荒

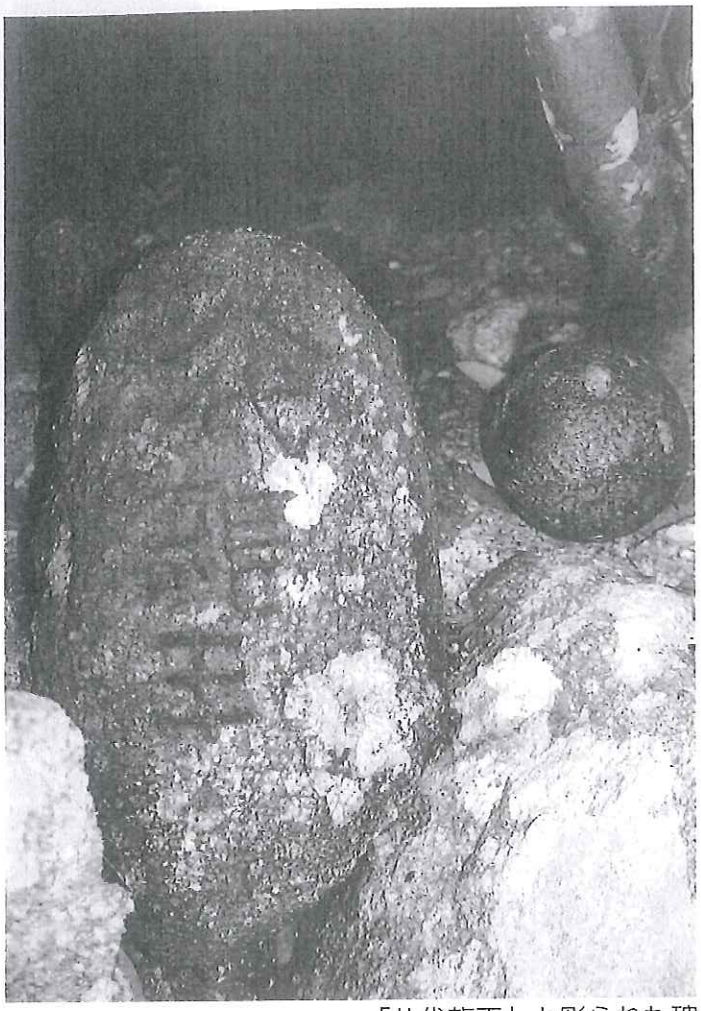
磯に碑石が立っていることなど、今まで聞いたことがなかったからである。

そこで、社会教育課の羽生課長と白浜を誘い、大山さんを案内人に立てて半山へ出かけた。大山さんも前につけた目印を頼りの案内をしてくれた。

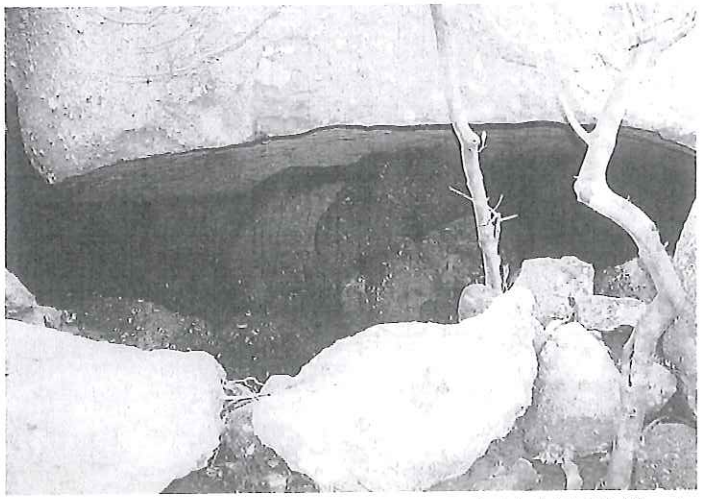
急斜面の半山を荒磯の現地までは、老人の私にはほとんど命がけだった。

しかし、荒磯に下りてみると確かに巨石のドームがあり、碑石が立っていた。

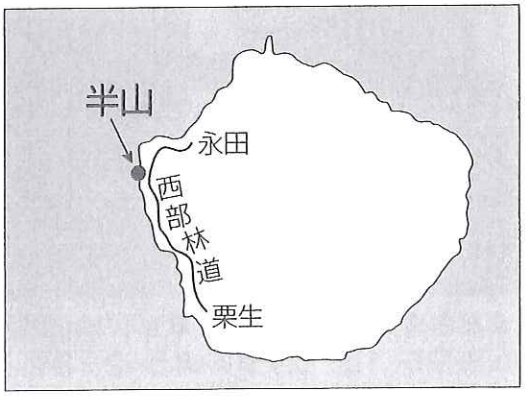
碑石に陰刻されていたのは「八代龍王」の四文字だった。



「八代龍王」と彫られた碑



巨大な石のドーム



八代龍王とは、八大竜王のことである。

起源がわからないほど古い神様で、インド系の神様であるらしい。

難陀、跋難陀、婆羯羅、和修吉、徳叉迦、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅

以上の八神を、八大竜王と称することが広辞苑にはでている。

竜神信仰は、もともとはインドで発生したもののようである。

ナーガ(大蛇)信仰が、時を経るごとに複雑になり、八大竜王へと発展した。

古代には東南アジアから東アジアにかけて広く竜神信仰がゆきわたっており、日本においても、海人族の住みついたところには、必ず竜神信仰が根付いている。

ただ屋久島では、これまで一度として八大竜王の碑石が発見されたことはなかった。

それがこのたび半山のような、人の寄りつかない崖下の荒磯で発見されたとなると、それだけで、実に奇妙なことといわざるを得なかった。

今でこそ、西部林道が開通したために、半山へ出かけることは容易になったが、開通する前は、陸地側から半山の荒磯へ到達するこ

とは、ほとんど不可能に近かった。
どうしても行きたければ舟で行くしかなかった。
偶然、その辺りの海で遭難した漁師が命からがら陸地へ泳ぎつきはしたものの、さて、人里へたどりつこうにも、崖が険しすぎる上に山また山で身動きもとれない、というような絶体絶命の岩場だった。
そのような場所に、どうして古びた八大竜王の碑石が立っているのか。
遭難した漁師が八大竜王の信者だったので、その岩場から脱出する方法も見つからないまま、獲れた魚で細々と命をつなぎながら、御加護を祈って、碑石を彫ったとでもいうのであろうか。
屋久島の花崗岩は風化しているために比較的軟らかいといわれるが、それにしても高さ三尺の碑石を造り、碑文を彫るには、かなりの日数がかかる。
おまけに館長たちがよく調べてみると、碑石の前には、竜神に供え物でもするかのように、直径二十センチの真円形の丸石が一個置かれていた。
真円形の宝珠は、竜神たちが必ず前脚の爪でつかんでいる、竜神のシンボルである。
ろくな道具も持たない遭難漁師に、真円形の丸石の彫れるはずがない。
館長はじめ同行者は、この不可解きわまる発見物に頭をひねった。
どう考えてみても、そのようなものが、半山の荒磯に存在するわけが考え出せなかったからである。
八大竜王の碑石は、これまで島内からは発見されていないことからしても、屋久島とはかけはなれた信仰圏の産物と思われるが、碑石は屋久島の花崗岩である。
なぜ、誰が、碑石を建立したのか。
しかも、人の寄りつくことの困難な、人跡未踏にもひとしい断崖下の荒磯などに――。
今のところ、話はそこまで。
その他、屋久島の竜のことについて、ご存知よりの方がおられるなら教えていただきたい。連絡先・上屋久町歴史民俗資料館(山本)
ちなみに屋久島には竜に関する伝説の場所は、①竜王の滝、②大川の滝、③羽神の滝、④蛇の口の滝　などがあり、また碑石ではないが、江戸時代、薩摩藩で当時最も勝れた絵師といわれた木村探元(一六七九から一七六七)という人が画いた「竜虎の絵」(軸もの)が歴民館に収蔵されている。
なお三国名勝図会には探元が屋久島安房の面影の水を取り寄せて、絵を画いていたことが記されている。

やまもとひでお　上屋久町歴史民俗資料館長

民宿 屋久の子の家 OPEN

1泊2食付き
8000円～

東シナ海を望む屋久杉風呂

山・里・海にあふれる自然の恵みと、伝えられた暮らしの知恵を生かす。
上屋久町永田275　TEL 0997-45-2137